

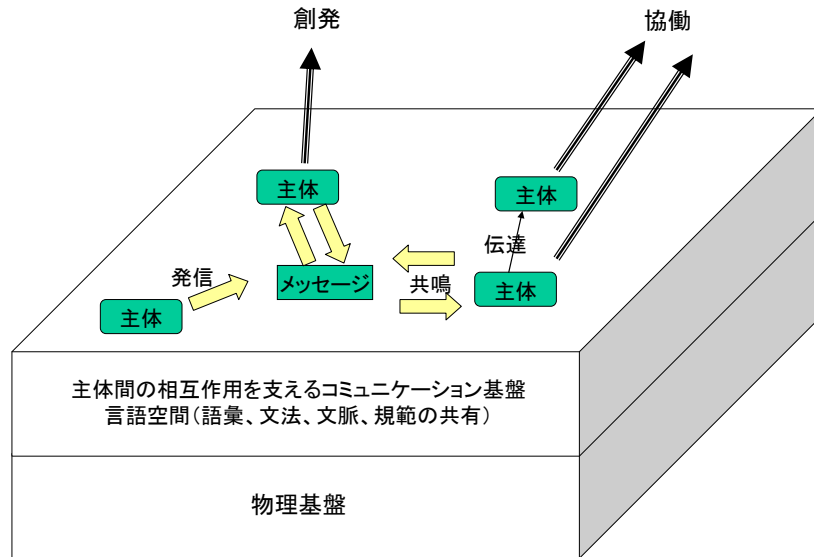
DPFの利用を促進する工夫について

庄司昌彦 Masahiko SHOJI

武蔵大学社会学部メディア社会学科 教授

「情報プラットフォーム」論からの考察

「情報プラットフォーム」論



情報プラットフォーム上の価値創造

多摩大学情報社会学研究所 平成17年度後期C&C振興財団寄附講座「情報社会学」第2回資料
『ITによる現場のエンパワメントと価値創造』(講師:慶應義塾大学 國領二郎)より引用。
(http://www.ni.tama.ac.jp/cc_lecture_aw/KokuryoHandout_7Dec05.pdf)

- プラットフォームとは
 - 第三者間の相互作用を活性化させる物理基盤や制度、財・サービス
- 情報プラットフォームは
 - 物理基盤とコミュニケーション基盤(特に語彙、文法、文脈、規範によりなる言語空間)の二層構造
 - 主体間のコミュニケーション(情報発信、伝達、共鳴)が行われ創発や協働が生まれる
- 協働を成立させるための機能
 - ことば(語彙、文法、文脈、規範)の共有
 - 信頼関係の構築
 - 誘引が働く構造の提供

参考:丸田一、國領二郎、公文俊平編著『地域情報化 認識と設計』(2006、NTT出版) pp144-145。
参考:國領二郎『オープンソリューション社会の構想』、p59、日本経済新聞社、2004年。

プラットフォームを機能させるために

- 「新たな生活様式」として社会活動が「オンライン+オフライン」へ変わるならば、特に「オンライン」機能の強化が重要ではないか
- **ことば（語彙・文法・文脈・規範）の共有**
 - 対面ならではの場 : 参加者が文脈を共有する体験
 - オンライン・常設の場 : より多くの人に機会を開く
 - まとめメディアの活用 : 編集を加えて議論・評論を生み出す
- **信頼関係の構築**
 - データへの信頼・評価 : 質、量、種類、頻度の可視化
 - 関係者への信頼 : 製造者・利用者の可視化、フィードバック
 - 「場」への信頼 : スピード感、透明性、相手の立場にたつ
- **誘引が働く構造の提供**
 - 多様なインセンティブ : 経済的・知的インセンティブ、楽しさ・ワクワク感

サービスデザイン関連の議論からの考察

参加型デザインの進化

1. ユーザーを無視して作りたいものを作る

- 自己表現、ユーザーを手段として使う

2. ユーザーを想像して作る (デザイン)

- ユーザー目線

3. ユーザーに参加させて作る (参加型デザイン)

- 声を聞く、一部参加させる

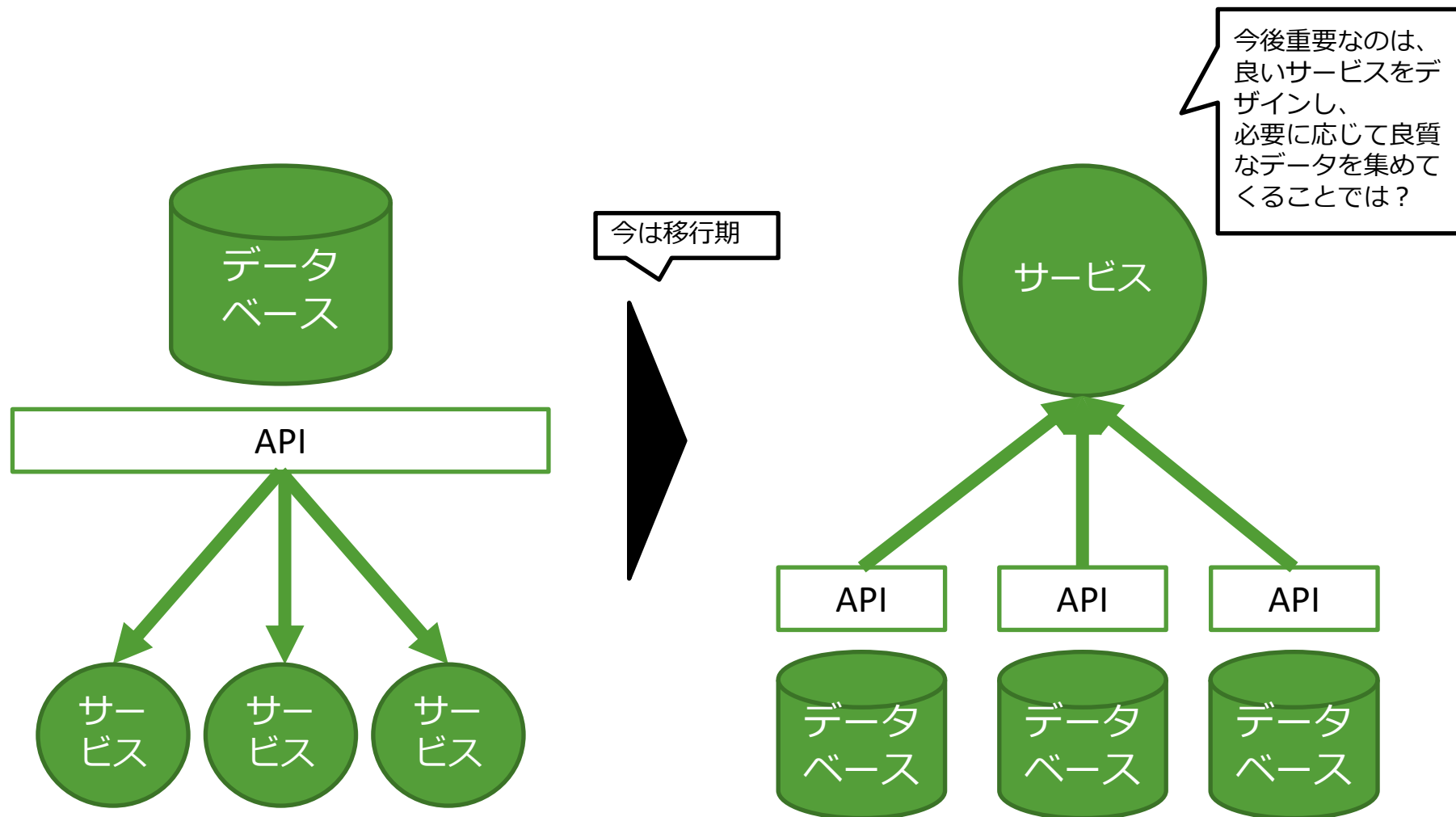
4. ユーザーが作るのを支援する (コ・デザイン)

- 多くの部分を消費者の自己決定に委ねる
- プラットフォームのアーキテクチャがゆるやかに方向づける

• DPFへの応用

- プラットフォームのあり方を「利用者目線」で考えるだけでなく、「利用者の声を聞きながら」考えるだけでなく、「利用者自身」が場をデザインし活用していく (のをゆるやかに方向づける)

「データ保有前提」から「サービス前提」へ



シビックテック関連の議論からの考察

シビックテックとデータ活用（先行研究より）

- データ活用におけるシビックテックの重要性
 - データ流通とその活用を持続的に行うには、当該地域住民が中心となり課題解決を担うシビックテックを根付かせる事が重要（瀬戸・関本2016）
- 幅広い人々の協働が必要
 - 幅広い人々の協働が不可欠（白松ほか2015）。
 - 「非技術者多数群」が最も多く成果物を作っている（大西ほか2019）
 - エンジニア不足（榎並2018）
- コミュニティ運営が重要
 - 「成果物多数群」は役割分担をしグループに分かれて活動。非技術者人材が活躍できる環境づくり、解決すべき課題を持つ外部団体との協力の構築、コミュニティ内で活躍する人材を称賛する風土づくりが重要（大西ほか2019）
 - 伴走しながらサポートしてくれるコミュニティの存在は、継続的な活動でとても重要（稲継ほか2018（鈴木））

シビックテックとデータ活用（先行研究より）

• 新規参加者が関わりやすくする

- 自発的なプロジェクトへの関与継続は困難。新規参加者が必要（白松ほか2015）
 - ビジョンや活動方針などの透明性や、新規参入者との協働促進が必要（白松ほか2015）
 - しっかりオープンに。行き先を分かりやすく見せる（稲継ほか2018（福島））
 - 進捗管理や情報共有に用いたデータのシームレスな外部公開が有用（白松ほか2015）
 - 通年・地元型、ワークショップを伴う活動、有識者メンター（瀬戸・関本2016）
- 参加の敷居を下げる
 - 可処分時間の中で参加。多数の市民の力を少しずつ集める（稲継ほか2018（福島））
 - 参加する敷居は低く、「参加しない」を許容する。（稲継ほか2018（藤井））

• 自治体との協働

- ボランティアでのデータ運用は、継続的が困難。自治体と一緒に運営していくことは「運営が継続しやすい仕組み」の観点で重要（稲継ほか2018（鈴木））
- 構造を作ってから対流を起こすプロセスは馴染まない。人々の熱量や交流が起点となって、自然発生的な協働として生まれている（稲継ほか2018（藤井））

東京都新型コロナウイルス感染症対策サイトの評価

先行研究が示す5つのポイント	評価	東京都サイトにおけるシビックテック
データ流通・活用の持続化 におけるシビックテックの重要性	○	<ul style="list-style-type: none"> 東京都はシビックテックを代表する団体である <u>Code for Japanに委託</u>
幅広い人々の協働が必要	○	<ul style="list-style-type: none"> 所属組織も専門性も <u>バラバラな100名以上</u>の人々が改善に参画
コミュニティ運営が重要	○	<ul style="list-style-type: none"> <u>Slack</u>をコミュニケーションの場として活用 オンラインのトークイベント、<u>非技術者も参加できる</u>1day ハッカソンなど日頃からさまざまなイベント等も運営。<u>コミュニティを重視</u> <u>褒める・感謝する</u>文化
新規参加者が関わりやすくする	○	<ul style="list-style-type: none"> 報道の効果もあり<u>新規参加者が次々に参画</u> Slackに参加すればよく参加の<u>敷居は低い</u> オープンに受け入れ<u>離脱も許容</u> <u>行動原則</u>を明示 Githubで<u>進捗などがシームレスに公開</u>
自治体との協働	○	<ul style="list-style-type: none"> <u>課題を持つ外部団体</u>（東京都）と協力 運用は都が都の予算で行うため<u>継続性</u>がある <u>定常的な運用と熱量の高い「対流」</u>が分離

主要参考文献

1. 丸田一、國領二郎、公文俊平編著『地域情報化 認識と設計』（2006、NTT出版）pp144-145.
2. 國領二郎『オープンソリューション社会の構想』、p59、日本経済新聞社、2004年。
3. 庄司昌彦「これからの時代の地域住民の合意形成（行政情報化新時代No.37）」『行政&情報システム』
4. 伊藤穰一「ネット時代にマスメディアはどう立ち向かうか？」日本記者クラブ、2013年6月4日。
5. 牟田学、「「APIで電子行政サービスを良くする」という発想は時代遅れに」、『manaboo.com 電子政府ブログ』、2017年7月1日 <https://www.manaboo.com/wordpress/?p=1907>
6. 榎並 利博（2018）、「シビックテックに関する研究：ITで強化された市民と行政との関係性について」『研究レポート』 No.452, 富士通総研経済研究所.
7. 大西 翔太, 小林 重人, 橋本 敬（2019）, 「シビックテックにおけるアプリ開発に影響する要素は何か？ -技術者と非技術者の関係に着目した分析」, 『第81回全国大会講演論文集』, pp515-516.
8. 白松俊, 大園忠親, 新谷虎松（2015）, 「Linked Open Dataを用いたシビックテックプロジェクトの透明性向上と協働促進」, 『人工知能学会全国大会論文集』 JSAI2015巻.
9. 瀬戸 寿一, 関本 義秀（2016）, 「地理空間情報のオープンデータ化と活用を通じた地域課題解決の試み～「アーバンデータチャレンジ」を事例に～」, 『映像情報メディア学会誌』 70巻, 11号, pp840-846.
10. 稲継裕昭（編著）, 鈴木まなみ, 福島健一郎, 小俣博司, 藤井靖史（著）（2018）, 『シビックテック ICTを使って地域課題を自分たちで解決する』, 勁草書房.
11. 一般社団法人コード・フォー・ジャパンのウェブサイト（<https://www.code4japan.org/>）、Slack、プレスリリース等